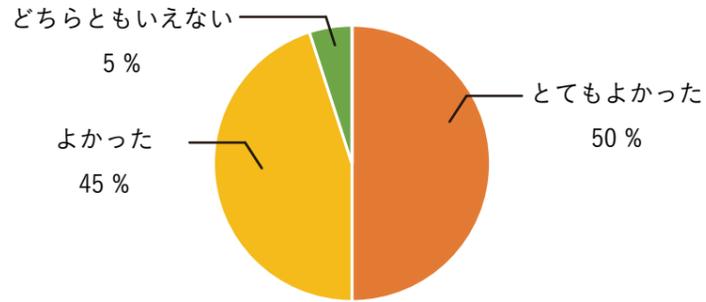


ふりかえりアンケート

満足度



キックオフ講演会・ワークショップは、参加者の多くが「とてもよかった」または「よかった」と回答いただきました。これからスタートする地域でのワークショップに参加する意向を示してくださった方もたくさんいらっしゃいました。

ワークショップで印象に残ったこと

ビジョンマップを作成することで想いが明確になった／住民全体で計画を考えていくことの重要性／各テーマについて学ぶことができたこと／実際に南丹市で活躍している方の現実に根差した意見がきけたこと／他市町村の事例紹介や高齢化社会に向けて前向きな考え方／地域の方が平和的に議論できる環境があることに驚きました／地域教育はまさに部局を超えて考えていかなければならない／初めてお会いした人と南丹市の将来について意見交換ができ、楽しい時間が過ごせました

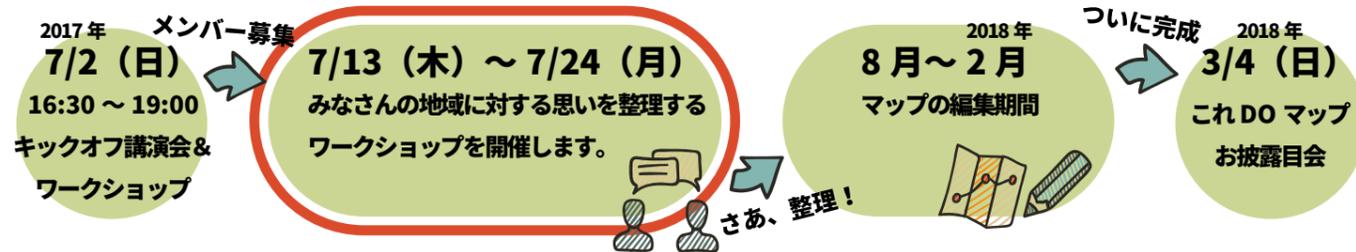
今後開催する住民ワークショップで期待すること

よりたくさんの人、いろんな立場の人がさんかできるように／すでに計画策定が進んでいるようにみえたので、これから開催されるワークショップの結果が計画に反映されるのかどうか気になる／時間が短く感じ、他地域の方とも話したい／旧町より区単位でこのようなワークショップができればいい／たくさんの方が参加できる工夫を／10年後のビジョンをよりよいものに、そして若い世代が活躍できるように頑張りたい

ワークショップのお知らせ

計画づくりの過程で、市民の方に意見を聞く中で、「計画書はなかなか見る機会がない！」との声をいただきました。そこで、市民の方にもわかりやすい計画書として、みなさんの声から地域で「やりたいこと」「やるべきこと」を整理した『これ DO マップ』をつくりたいと考えています。このマップはこれからの地域づくりの指針として活用していく予定です。まずは7月の連続ワークショップで、みなさんの地域に対する思いを教えてください。

これ DO マップをつくる流れ



studio-L

studio-L (スタジオエル) は、代表の山崎亮が2005年に設立。地域の課題を地域に住むひとたちが解決するコミュニティデザインに携わる。これまでに、いえしま地域まちづくり、海士町総合復興計画など、まちづくりのワークショップや住民参画の総合計画づくりなどに携わっている。

《問合せ先》南丹市 企画政策部 定住・企画戦略課 担当：塩邊、松本
 [住所] 〒622-8651 京都府南丹市園部町小椋町47 [電話] 0771-68-0003

第2次南丹市総合振興計画 キックオフ講演会&ワークショップ

2017.7.2 SUN

16:30 - 19:00

南丹市役所 2号庁舎 3階 301会議室
参加者24名

プログラム

- ・はじめに 総合振興計画策定について
- ・ワーク1「南丹市での暮らしを考えよう」
- ・講演 講師：山崎亮
「今後の暮らしで大切なことを知る」
- ・ワーク2「10年後の南丹市での暮らしを考えよう」



現在、南丹市では、今後10年間のまちの指針となる第2次南丹市総合振興計画をつくっています。南丹市で暮らす方にも参加していただき、みんなで南丹市のこれからの話し合い、計画づくりを進めていくことを目指しています。そのキックオフとなる、講演会&ワークショップを開催しました。

はじめに 総合振興計画の策定について 南丹市定住・企画戦略課

総合振興計画は、今後 10 年間のまちづくりの指針となるものであり、行政のすべての分野における施策の方針を掲げた長期計画です。第 1 次計画は、旧町の効果的な施策を合わせた盛りだくさんの内容であったため、方向性がつかみにくいこと、また、評価指標があいまいで十分な評価ができないという課題がありました。以上をふまえ、第 2 次計画の策定に向けて、下記の取り組み方針を掲げて進めています。

- ・ 施策連携プロジェクトの検討：行政各課の連携、地域と行政のつながり
- ・ ビジョンマップの制作：地域のビジョンと重点的に実施していく取り組みを整理
- ・ 職員研修の実施：地域密着型の公務員育成



ワーク 1「南丹市での暮らしを考えよう」

市民ワークショップでは、できるだけたくさんの方に参加いただき、地域のビジョンを考え、ビジョンマップにまとめていきます。まずは個人の今の暮らしを「お仕事」「家族」「住まい」「休日」「ご近所さん・地域」「友人関係」などシートに書き出し、自己紹介をしていきます。



講演「まちの計画をみんなで考える」 講師：山崎亮



個人個人の生活の実感を頭の半分で思い起こして、もう半分で今後の日本、南丹市がどうなっていくか、これからの時代の方向性を考えます。その上で 10 年後のまちの未来を描いていきましょう。

定住・移住促進

高齢化、人が長生きするようになったこと自体は課題ではなく、若い人が都会に出て、高齢者だけで生活しなければいけなくなったことは課題かもしれない。しかしながら、若い人が高齢者を支えるのではなく、高齢者が若者を支えるような、発想の転換が必要です。定住や移住を考えた時に、どうやって魅力的な仕事を生み出していくか、多様な働き方が可能な地域づくりが求められています。そして、地域の取り組みは信じて取り組み続けることが大切です。

事例：徳島県神山町



南丹ブランド

4 町それぞれの魅力を上げていく一方で、「南丹市」という名前をどう広げていくためには、市民一人ひとりが情報発信していくことが大切です。泉北ニュータウンの事例では、住民自信が SNS を使って情報発信をしていくというプロジェクトを進めていました。一般的なことを発信するのではなく、おもしろいプロジェクトを自分たちで立ち上げ、そのプロセスを発信する自作自演の情報発信により、強いつなりのあるファンをつくっていく活動をしています。事例：堺市泉北ニュータウン



環境資源の活用

南丹市は 88% が森林。自然や景観など地域の資源を未来にどう継承していくかが課題です。一度、人の手が入ってしまった森をどうケアしていくのか、以前のように手が入らなくなってしまうことで、災害に弱くなっている現状があります。山と里との間の付き合い方が大切になってきます。体験型の観光、環境保全型の農業、バイオマスをどう関係づけていくのか、この地域で健康で長生きに暮らしていくかを考えるときに避けては通れない課題です。林業の従事者はどんどん減ってきてしまっている。自伐型林業など、個人個人が新しい方法を生み出していくアイデアが求められています。

ワーク 2「10年後の南丹市での暮らしを考えよう」

まず、10 年後の暮らしを「お仕事」「家族」「住まい」「休日」「ご近所さん・地域」「友人関係」などシートに書き出してイメージしていきましました。その後、10 年後の南丹市が住み続けたいまちであるためには、どんなまちであってほしいか、ビジョンを付箋に書き出していきましました。お住まいの地域を「まち」「里」「山」と分類して考えたビジョンを共有し、模造紙上にまとめていきましました。そんな、それぞれのテーブルで話し合った意見を整理して下記にまとめました。



環境資源の活用 / 南丹ブランド

まち

- ・ 南丹市のブランドイメージがある
- ・ これまでにない働き方が実現できる

里

- ・ 自慢しなくなる農業がある
- ・ 若者が憧れるかっこいい農村生活がある
- ・ 循環する仕組みがある

山

- ・ 公共施設を活用した体験交流がある
- ・ 都市部にはない自然体験ができる

全体

- ・ 外国人をターゲットにした観光展開ができる
- ・ 必要な情報を手に入れられる発信できる

災害への備え / 保険、医療、福祉

- ・ 災害のとき、すぐに助け合える地域のつながりがある
- ・ 地域全体で健康を考える機会がある
- ・ 車がなくなっても、スイスイ出歩ける

- ・ 地域全体で子どもを育てる
- ・ ハイテクな里山環境がある
- ・ 災害に負けない地域づくり

- ・ 徹底して森林の管理ができています

地域教育 / 地域コミュニティ

- ・ 同じ世代が交流できる機会がある
- ・ 学び・交流の機会がある
- ・ 日常的に強いつながり意識がある

- ・ 後世に伝えていく里山文化が残っている
- ・ どこにいても挨拶される
- ・ 幅広い世代が交流できる

- ・ 山間部ならではの濃密教育

- ・ 若い人がバリバリ活躍できる地域に
- ・ 地域の人が多機能型学校がある



保健・医療・福祉

高齢で元気で幸せに暮らしている人を一人でも増やしていくこと。日本は健康寿命と平均寿命の間が長く、10 年くらい何らかの疾患を抱えて生活している人が多い国です。改善していくためには、みなさん自身の生活習慣を変えていくことと、誰かと楽しく何かをしながら生きていくことが大切です。10 万時間という考え方があります。20 歳から 65 歳までの労働時間が 10 万時間。65 歳から 90 歳まで家庭や地域で過ごす老後の時間(1 日 16 時間)も 10 万時間。全ての労働時間と同じだけ老後の時間がある。地域で元気で楽しく生きていく方策を実現していかなければいけないのです。事例：秋田市年の差フレンズプロジェクト

災害への備え

原子力発電所の問題もあり、自然災害も増えています。自助、共助、公助をどう考えていくのかについても、話し合っていく必要があります。長久手市の「なでラボ」の取り組み「キャンプ de 防災」は、防災をどう楽しくしていくかをテーマにしたプログラムです。今家にある防災グッズを集めたり、一晩過ごしてみるなど、防災自体を楽しいプログラムに変えていくことや、日々の生活の中に防災意識をつくっていくこともできるのではないかと、取り組みが進められています。事例：長久手市なでラボ



地域教育

地域から若い人がいなくなる理由として、都会にあるお店があるかどうかではなく、そうではない地域の魅力を子どもたちにどう伝えていくかが大切です。また、偏差値に偏った教育が問われてくる時代になるでしょう。偏差値の高さやその応用力が必要な仕事はすべて AI でできること。仕事なくなるだけでなく、その教育で将来社会で活躍できる人を育てられるかを考えていかなければなりません。そして、教育には学校教育と家庭教育と地域教育の 3 つの分野があります。これは、まちづくりにも関係してくるものです。今、こうしてまちの将来を考えることは社会教育になるのです。

地域コミュニティ

防災、福祉、社会教育などの基本単位は地域コミュニティです。地域で生きていこうと思ったときに、やはり地縁型コミュニティが大切になってきます。また、地縁型コミュニティというのは町内会・自治会だけでなく、各種団体も含めてみんなでつくっていくものとして理解したほうがいでしょう。まちづくり協議会という地域自治制度を条例でつくっていくやり方、また、小規模多機能自治という会社のようなものにしていくやり方などがあります。いろいろな人たちと協働しながら、facebook や Instagram などの SNS を活用するなど、あたらしいつながりを実現できる地域をつくっていくことも必要となってくるでしょう。